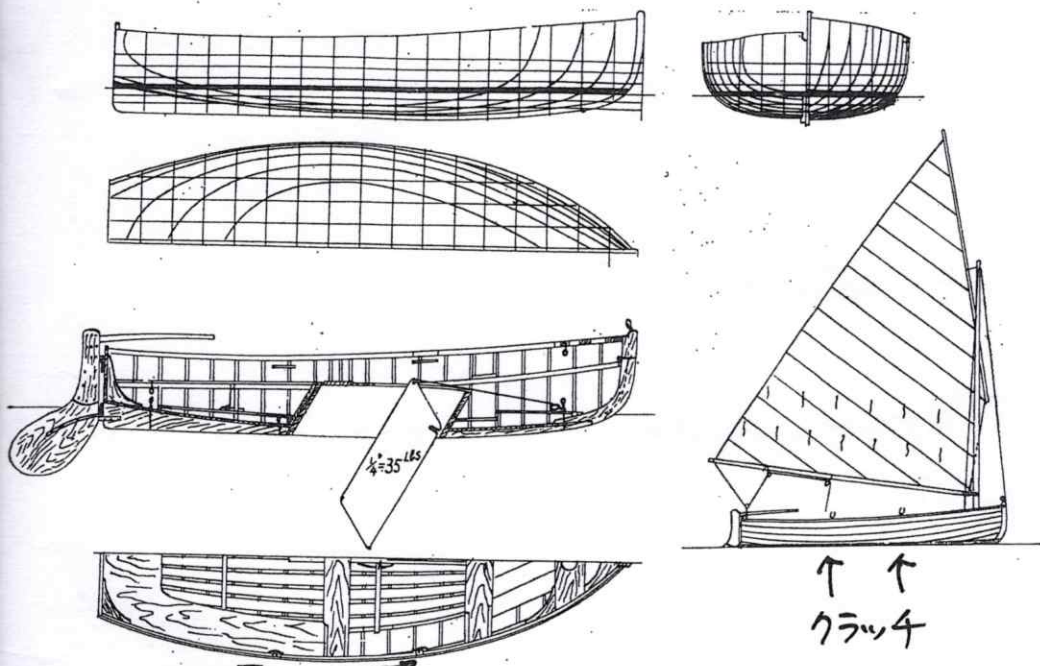


セイリング: デインギー(小型帆走艇)に乗ってみればわかるが、エンジンが壊れていても、以外に軽快に動けるものです。流行のシングルハンター(一人乗りのデインギー)は、別名キャブサイズ・マシン(?)と云われ、簡単に横転しやすいが、軽い分船速が早い。

最初のロンドンオリンピックで正式採用された、12フィートのAクラス・デインギーは、鎧張りの木造外板で構成され帆走すると、チャブチャブと可愛らしい音がして、多くのファンがいる。たった12フィート(3.6m)の艇でも、オリジナルの四面を見ると、4玉のクランチがはいており、一人で横漕すれば、かなりの風の中でも行動出来るように工夫されている。小生の宝物の1962年の船誌の1月号に、横山晃氏のA級デインギーのレポートがあるので、162の頁にのりつけします。マニアに取っては、一冊一万円でも、買い手が少なく、58年前のもので、大先輩の話では、当時A級デインギーには、エクステション・テラーは無く、適当なロープを好みの長さに切って、取りつけ使用していたそうです。

TIKI-30のエクステションテラーは現物は、3.32mですが、軽いアルミパイプを使用しようと思っている。#446-IIの横山7.6mのスライドハッチとその戸袋のFRP製のメス型を、そっくり流用しようと考え、オリジナルは、左右共に内側向きだったのを、後向きに変更した為です。⇒(3頁に続く)



クラッチ →

Aクラス・ディンギー			
全長	12呎 0吋	帆面積	100平方呎
水線長	11 0	排水量	0.28トン (1人乗りにて)
幅	4 8	船体	クリンカー張り、無甲板
深(中決にて)	1 8 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	帆装	ラグ・キャット・リグ

第 49 図

A系ディンギーを未知の人のために、横山晃比の名丈を一すだけ、四面の下にのりすけしておきます。今から82年前の体験で、おなじコースを、30フィートクラスのエンジン付きのクルーザーで、現在のセラーは楽しんでいられると思えます。まあ、一は軟弱化している様に思えます。

Aクラス・ディンギーは、レーサーとしてよりも、しる海や河のワンダーフォーゲル(直訳すれば渡り鳥であるが、往時、ドイツの若人の間に流行した山野交渉のスポーツである)に適するヨットなのである。

他人に見せるための艇ではなくて、真に海を愛する人の船なのである。——いわば、内省的味あいに生きる船——とでも云うべきか?

私は何時も、ディンギーをクルージングに用いた。荒川放水路、隅田川、多摩川などを歩き、春から秋にかけては東京湾を縦横に旅し、そして時には、三崎や房総にまで足をのびた。……クルージング、これには、本格のクルーザーを使いたいものである。しかし私はディンギーが不適当だとは思わない。むしろ、スナイプやスター・クラスよりは、遥かにクルージングに適していると思う。

私の場合——それは海を溺愛する者のやみがたい情だったのである。

——私の1938年の手記——

私には、3年間使い慣したディンギーがある。ディンギーを駆って三崎の海へ。それは久しい念願だった。私はその可能性を追求するために屢々コンパのみによる夜間航行や、東京から木更津、富津方面

の日帰り巡航を試みた。そして単身、三崎クルージングを成し遂げたのは昨年(1937年)の夏も終りに近い頃だった。

東京——富津——保田——三崎——羽田

三崎の碧い海、海を蔽う鰯の群、風浪に梳られた凄愴な城ヶ島の風貌、白浪を咬む暗礁の脅威、そして、剣崎灯台直下に、急潮と強風に挑んでの死闘3時間の思い出等、余にも鮮かな印象が、脳裡に生々しい。

今年(1938年)も夏となった。再び三崎の海へ! 7月16、17の休日こそ絶好の機会だ。食料、水2升、コンパス、海図、ライフジャケット、レインコート、防寒具……すっかり積み込んだ。メンバーはA少年と僕。

出発。驟雨の後の清々しい夜風に乗って品川を後にする。時に15日午後10時30分、曇天の月夜はほんのり明るい。

N.W.Wの微風、落潮、航路浮標の明滅を追って、S.S.Eに舵を引く。羽田を廻る頃から風は落ち、ついには完全な凧となった。ただ静寂。鶴見の鎔鋳が天の一角を染めている。点々と続く航海灯は、魚河岸へ急ぐ漁船であろうか。犬の遠吠も幽かに聞えて来る。

午前3時、空は舞れて、N.E.Eの軟風を得、艇は

よってキャビン後部に位置する舵棒が、船室に  
 出入りする度に、シヤマになりそうなので、S字曲線  
 に変形させて作ろうと考えた。舵棒と、それを左右  
 に連結するアルミパイプの結合部をきっちりネジ  
 止めするのではなく、6mm位のロープをゆるみを持  
 たせて、結ばば良いと考えた。高級な金具や、  
 ゴム製のユニバーサルジョイント等、探せば見つか  
 るかも知れないが、ロープで充分と思える。G.ウオ  
 ーラム設計のTIKI-30の図面を購入して、色々学  
 ぶ点があった。15万円の設計図を求めて、9mmの  
 合板の上に、船底板、舷側板を切り出して、結  
 合する実体験をしないと、学ばない事がある。A  
 級テンキヤーの製作時は、クリンカー張り(鎧張  
 り)の凸面と凹面のR部分はよげに、ゴム手袋  
 が穴が開いて、皮フがすり減って血が出ている  
 のにも気づかず、仕事を続行した実体験が  
 ある。現在A級テンキヤーの完成品は、  
 150万はすると思えますが、子供の乗るOPが  
 50万円する時代になったのだから、時代の流  
 れは、誰のせい(?)でもない。四国のお遍路  
 に出向いたI氏の息子が、アジア大会で使った  
 OPが大事に取ってあるそうで、外国のY-カー  
 の舟艇だそうだが、公式レースに出ないで、練習  
 用を使用するなら、マス型取りをしても大丈夫でしょう

龍ヶ崎のく代の息子さんに、霞ヶ浦でOPを習わせるのに使用すれば良いと思えた。TIKI-30が仕上っても、OPやA級ディンギー製作指導(?)とやる事はいくらでもある。水戸の千波湖でも、茨城町の涸沼でも、大洗町の船渡でも、OPディンギーや、A級ディンギーのセイリングしているシーンが見られる様にしないと、海事普及活動をしているとは云えないと思える。メインシートを引いて、セイルを正しくセットと、船がスルスルと帆走り出す感動は、体感しないと話にならない。二度目の牧家さんとの間に二人の息子をさすかった。車社会で、車の災いから彼等を守る為に、車の基の50ccのエンジンで動く、バイクの操縦をマスターさせようと、ヤマハのDT(?)の中古を購入した。近所の農道で練習して、乗れる様になったら、バイクを軽トラに積んで、マリーナの隣のサンビーチで、バイクで走らせた。「ファミコンより面白い……」と云っていた彼等は、二人共娘をさすかって、人の親になった。兄の方の話では、高3の時、12月に学校一のマドンナにデートを申し込んだそうだ。卒業までの3ヶ月の期限付きで、付き合い合っさせてもらったそうなの。小生は中学3年の夏休みに、バレー部のマドンナに交際を申し込んで、OKをもらった体験をした。親子

二代に渡って、マドンナとは結ばれなかったが、それは、それで思い出が出来て良かったと思えます。初の丈島行きも、初の鳥羽レース参加の回航も、ハ丈島クルージングも、今となってはよりよき思い出になって、両親が元気な時に家を空けられる事が出来て、幸でした。U-30を自作して(4人の共同オーナー)、鳥羽10-11.レースで、Bクラス総合3位の好成績を出したり、小名浜へ大洗レースの優勝等、自作船で帆走するのは、何とも云えない快感がある。7月の中旬金曜日にスタートする云統の10-11.レースに、初参加した時は感動したものです。我々はヤマハ-300でしたが、石原慎太郎氏は〈エリクソン46〉、石原裕次郎氏は〈サンバード SS54〉に乗り、石原兄弟の豊かさ(?)を垣間見ることが出来た。1980年<sup>に</sup>初参<sup>加</sup>して以来、〈弥勒II〉の参加も加えると、北関東で外洋レースの経験者では、小生が一番多く参加している。仲間には、『10-11.レース参加は1回で10万円の予算を見て下さい...』と話してきた。100万円の預金と、10-11.レース10回経験すると貴方は、どちらを選びますかと話せば、たいがいの方は理解してもらえた。理解出来ない人は、何処にも行けない替りに、通帳の残高だけを見るだけの楽しみになっている。

初の大島、三宅、八丈島は、東京のS社の持船の  
カリブの27で、初の島羽レース参加はヤマハの30で  
初の島羽レース・ファーストホームもS社の持船のく風見  
鶴 高井43)でした。S社のヤマハ30で、小笠  
原レースに参加するべく、廻航に出向いたが、負傷  
者が出て、三宅島に避港し、負傷者はヘリで広  
尾病院に搬送され、無事に退院出来た。

自作した横山12mの〈弥勒II〉で、2005年の小笠  
原レース、2006年の石垣〜台湾、2007年のアリソン  
レースと3年連続で、5月連休前から家を空けたら、  
嫁さんが「もう帰って来なくていい……」と云うので、  
その後、110-11と沖繩で誤魔化した。2013年  
に義母が他界し、2014年に嫁さんのOKが出たの  
で、長年の夢であった、太平洋往復の横断航海  
をする事が出来た。ゴールドゲートブリッジの下  
を通った感動は、共同オーナーの3人にも味わっ  
てもらいたい。

R2  
10/29  
藤  
2014年の太平洋横断の帰  
路に、311の震災のゴミを目撃した。目撃した  
からには、知らんぷりは出来ない。2015年の12月  
に英国のJ.ウオーラムが、現在札幌にもどったKa  
比に頼んで、30ftのTIKI-30の四面を15万円  
で購入した。金欠病の現在ですが、T社の7.6  
mも12mの〈弥勒II〉も乗れるし、もうあじTKI  
-30にも乗ることが出来そうと、案外するより生  
むがやあし……』と結びます。